

志を持つこと

鈴木太郎

類句・類想についてのわずらいは、すでに江戸時代から続いている。一句の発想や趣向が、他の句と似ていることを等類といい、語法や手法のかたちを借用して別な素材を用いて一句にするものを同巢という。芭蕉は、清滝や浪にちりなき夏の月　芭蕉

白菊の目に^{まなこ}立^たて見るちりもなし　芭蕉

の句を園女宅で作ったので、「夏の月」の句を捨ててるように言つたと伝えられている。その作句態度のきびしさは目を見はるものがある。類似作品に対して人に厳しく自分に甘いのは、芭蕉をのぞきその弟子を含めても三百年前とあまりかわつてはいない。

現代では二つをまとめて類句と呼んでいるようだ。これは五・七・五、十七音の短詩型の宿命というべきものと大方の者がうべなっている。類想・類句の問題で、俳

は、しっかりと覚えておきたい。真似をするのは、非力な者だから放っておけばよいという意見もあるが、俳句は言葉で作る知的な文学（文芸）であるから、もう少し厳しく指摘してもよいかも知れない。

また、慣用句や常套語による類似句には注意をしたい。

人生のいまどのあたり

の句も何年か前の俳壇で問題になったことがある。掲句もその作家の独自の感懐というより、一般的な嘆息あるいは、演歌的感慨に近いものではないだろうか。さすがに総合誌では見ることはなくなったが、結社誌では散見することがある。これは季語から単純に発想をおこなうために、詠嘆の情緒に傾きすぎて画一的になり、結果として類想・類句におちいるのではないかと考える。

現代は長寿社会だから、高齢から俳句をはじめ人も多くなる。文学としての志よりも自分で句を作り楽しむというような、閉塞的な世界がますます拡大していくように思える。

吟行句会で類句・類想が出やすいのは、時候の季語を用いた場合である。ちなみにいくつか季語を抽いてみると、秋・初秋・文月・立秋・秋めく・新涼・仲秋・葉月・九月・白露・晩秋・秋彼岸・十月・秋の朝・秋の昼・秋の暮・夜長・秋澄む・冷やか・爽やか・秋麗・身にしむ・

人という範疇（はんちゆう）をどこまで広げてよいか、いまずぐには答えは出しにくい、この稿では各結社の同人以上の者を標準におきたい。

現代は何かと忙しいが、俳人として四Sや人間探求派の作家や、現在活躍している作家の有名な句や話題になった句は是非覚えておきたいものだ。自分の師や周辺の人々の句集しかよまない同人が多いせいで、残念ながら往々にして問題がおこるのではないかと思われる。

かつて飯田龍太の作品に類似したものに変わったところがある。

冬の雲生後三日の仔牛たつ

香奠にしるすおのが名夜の秋

問題になったのは、粹で囲った部分の季語が異なっていただけの句であった。故意にまねをしたり類句をつくるのは論外としても、現存する作家の有名な句や評判の作

寒露・やや寒・朝寒・夜寒・冷まじ・秋深し・行く秋・冬近し・九月尽などが目につく。

時候の季語を用いると、どうしても二句一章の句が多くなってくるきらいがある。それと同時に遠景の句になりやすいため、一枚の風景画のようになりがちである。言葉を換えれば焦点がしぼりきれず、誰が詠んでもよいというような句に陥りやすい。時候の季語が動作や形状を表わす季語でなく、いわば空間や空気のようなもので、実感がとぼしいところに原因がありそうだ。

時候の句を詠むときは、一句に臨場感あるいはリアリティを出すことに意をそそがないと、平板な句になりやすいものだ。もう一つは、季語には季感をきかせるようにすることが最も大切であろう。現在では俳人の多くが都会生活者であり、農業を中心として定着し継承されてきた季語が、実感を得にくくなっているせいもあるろう。

写生句・風景句の方法論が俳壇の主流をなした時に、類想・類句が出やすくなったのも見逃せないところである。だが、前衛や社会性俳句にも同じようなバターンの句やポーズの句があふれたことも事実である。自分自身で常にもう一人の客観的な自身の眼を鍛えるより他にこれを防ぐ方法はない、と断言してもよいだろう。定型の恩寵に甘えまいという志を常に持たたいものである。